

連載

刀剣の歴史と思想

第20回

酒井 利信

示現流にみる心の利剣

日本における刀剣の思想が神道を中心にして展開してきたことは事実である。これは中國道教から神道へとつながる大きな流れが存在することと大きいに関係する。

一方で、日本の諸文化において、仏教の影響は無視することができない。剣術も例外ではなく、特に近世以降、仏教とのかかわりのなかで発展してきた部分は大きい。そして、さほど多くはないが、剣術における刀剣の思想にも仏教色はみられる。

今回は、示現流をサンプルしながら、刀剣思想の仏教色^①を垣間見ていきたい。

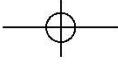
▼▼示現流について

を開いた。参籠開眼の伝説が語られている点、この段階では神道色が強い。

示現流は、薩摩藩を中心に発展した流派で、島津家臣であつた東郷肥前守重位（ちゆうい）^②を流祖とし、その本源は飯篠長威斎の天真正伝香取神道流にたどり着く。

東郷重位は、この自頭流の秘伝を善吉なる人物から相伝されている。善吉は天寧寺の曇吉和尚の弟子であり、重位が善吉から剣術を学んだのは、天正十六年（一五八八）、島津侯にしたがつて上洛し、この寺に参禅したときであるということが伝えられている。この伝説の史実としての信憑性については注意を要するが、東郷の流派が仏教の影響を受けていることはこの辺りから





刀剣の歴史と思想

示現流にみる心の利剣



善吉の像（京都天寧寺蔵）

窺
える。

東郷重位は、薩摩に帰国後、流名を示現流と改めた。

また、東郷は、藩の師範であつた東権右衛門正直と藤井六弥太統長からタイ捨流も学んでいる。タイ捨流は新陰流系統であり、重位が神道流系統のほかに新陰流系統の剣術をも修めて示現流を創始したことについておきたい。

示現流の伝書に、『示現流聞書喫緊録』

という大部の史料がある。天明元年（一七八二）に久保七兵衛紀之英が著したものであるが、これに仏教的な色彩をおびた刀剣の思想が窺われる。

▼▼身体を司る心

示現流に限らず、近世の剣術では、一般的に心の問題が解決すべき最重要の課題であつた。

その前提には、心が身体を司るものであるという自覚がある。

緊張し過ぎて身体が思うように動かなかつた経験は誰しも持つているはずであるが、そもそも心の問題であるはずの緊張という状態が身体に大きな影響を与えているのである。剣

術は、本来、一瞬で決着を見るような生死の境を前提としていたために、次の瞬間に自分が絶命しているのではないかといった恐怖心等々、さまざま、しかも大きな心の乱れが自らの内に起こる可能性を秘めている。こういった心が身体に対してマイナスに影響した場合、これは日常の事柄とはちがつて大問題である。悪くすれば死につながる。剣術家は、心が身体を司っていることを経験的に知つていて、この問題の解決に相当のエネルギーを注ぎ込んだ。

例えば、有名なものとして、新陰柳生流では基本伝書である『兵法家伝書』⁽³⁾の中では、心のあり様を徹底的に解き明かしている。ここで述べられている心法論⁽⁴⁾には、禅僧である沢庵宗彭の影響がかなりあつたといわれており、その記述の仕方には多分に仏教色がみてとれる。柳生では、何ものかにとらわれる心、とどまる心を嫌い、これを病^(やまい)という。病は、諸々の身体活動に悪影響を与えるために、これを取り去ることを説く。

示現流も、基本的には同様の思考をする。『示現流聞書喫緊録』には、「我が一身の主





示現流流祖東郷重位肖像画

率たる本心」などというフレーズが記されており、示現流においても心は身体を司るものとして考えられていた。

そして、理想としない、悪い状態の心を、特に三毒という仏教用語を用いて語っている。

三毒とは、辞書をひも解いてみると、衆生の善心を害する、もつとも基本的な3種の煩惱を毒にたとえたもの。貪欲（むさぼり）、嗔恚（いかり）、愚癡（愚かさ、無知）の三つで、略して貪嗔痴のこと、としている。

三毒とは、辞書をひも解いてみると、衆生の善心を害する、もつとも基本的な3種の煩惱を毒にたとえたもの。貪欲（むさぼり）、嗔恚（いかり）、愚癡（愚かさ、無知）の三つで、略して貪嗔痴のこと、としている。

▼▼自らを斬る心の利剣

示現流の場合は、これとは趣を異にしている。

以下、「示現流闇書喫緊録」の記述である。

新当流において、我身の穢れを祓いの太刀で呪的に排除したことは既に紹介したが、これは諦^{あきらめ}靈^{みたま}劍^{けん}を媒介とし、タケミカヅチという神の後ろ盾をうけての技術であり、いかにも神道的である。

新当流において、我身の穢れを祓いの太刀で呪的に排除したことは既に紹介したが、これは諦^{あきらめ}靈^{みたま}劍^{けん}を媒介とし、タケミカヅチという神の後ろ盾をうけての技術であり、いかにも神道的である。

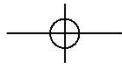
太刀は敵を切斷し、殺す者成るに付て、敵を殺すより先我が三毒を殺し、心を強明正光にして太刀を採り、敵を可^し殺すと示す處也。

太刀は敵を斬り殺すものであるが、敵を殺すよりも先ず自らの内にある三毒を殺し、心を強明正光にしてから太刀をとつて敵を殺しなさい、といった内容である。

同様のものとして次のような記述もある。

案するに當流を修行する壯士は、心の利剣を以て、刹那の間も貪嗔痴の三毒を胸中に不^レ宿^セ、常に可^レ為^ル切斷^也也。——中略——敵^{すま}于我^にを為^ル打臥^{すわ}——剣術よりも我が一身の主宰たる本心に害を成すの三毒の譬かたきを切断する義劍の術を学ぶべし。





刀剣の歴史と思想

示現流にみる心の利剣

示現流を修行する者は、心の利剣をもつて、極めて短い時間でさえも貪喰痴（癡）の三毒を胸の中に宿すことがないように、常にこれを切斷するべきである。自分の敵を打ち倒すために、剣術よりも、我身を主宰する本心に害をあたえる三毒を切斷する義剣の術を学びなさい、という内容である。いずれも敵に対する前に、自らの内にあらざれ三毒と表現される煩惱を斬ることを説いている。その前提には、自分の体を司つてゐるのは心であり、これに雜念があると敵に対した時の太刀の操作に悪影響があるという自覚がある。しかし心の問題であるだ

けに実際の敵を斬るようにはいかず、これを心の利剣で斬るという。つまり剣のもつイメージで斬るというのである。

このことは、この段階で既に、剣を敵のみならず、自らの内なる心をも斬ることができるものとしてみる思想が定着していることを意味している。

従来こういった思想の根底には、これらの剣が神や仏のもつ剣であるからといった根拠付けられたをしてきた。

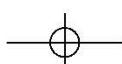
例えば、松浦静山の著した『剣攷』には、次のような記述がある。

剣は自らの内にあつて利剣という。神仏が剣を持つのは、人を殺すためではなく、心の邪氣を斬り払つて悪念をなくすためである。これを心の利剣という、といった内容である。

ここでは、剣が内心をも斬るものであることを述べるとともに、剣にそついた性質があるのは神や仏がもつものであるからといった思想を窺うことができる。

剣は内に有て 内とは身の内心の用を

いふ利剣と云ふ。神仏の剣を持給ふは、人を殺すに有らず。心の邪氣を切払つて、悪念を亡し給ふ剣也。是を心の利剣と云ふ。



神の剣としては、新当流の思想の拠りどころとなっていたタケミカヅチの師靈剣などがあり、また仏の剣としては、修驗道思想を紹介した際に取り上げた不動明王の智慧の剣がある。これは『聖不動經』で三毒を絶つものとして記述されていたものであり（⁶）、通常、利劍といった場合には不動明王の智劍をさす場合が多い。

しかし、ここで取り上げた示現流の記述では、剣は敵を斬るものであるが、その前に自らの内面をも斬るものであると認識しつつも、その根底にある神や仏の剣であるからといつたことはあまり表に出てこない。

これも、それまでの思想的な積み重ねを前提としつつ、剣の象徴性が独り歩きした段階の事例とも理解できる。

思想史的には次のステージへと進んでい るわけだが、示現流では興味深い展開がみられる。

▼▼剣との一体化

この文章を読むには、多少、予備知識が必要である。恐らくは新陰流系統の影響かと思われるが、大きな意味での心のことと細分化して心とか神という場合がある。特に中核となる重要な心については「神」と表記する。新陰流のみならず日本ではこ

が神不_ば乗_ら、劍に無_な威光_{きこう}者也。我胸の殺人劍の神より柄持掌の神力に入り、柄持神力打太刀の打つ処の神に入り、打処の神力より又我が胸の神に通達し、從_ひ是して循環して端なく、太刀の神と柄持神と我が神と、一円にして一也。

この文章を読むには、多少、予備知識が必要である。恐らくは新陰流系統の影響かと思われるが、大きな意味での心のことと細分化して心とか神という場合がある。特に中核となる重要な心については「神」と表記する。新陰流のみならず日本ではこ

ういった言葉の使い方はよくされる。「精神」といった場合、心ではなく神と書くことからもわかる。いずれにせよ、心も神も広義の心のことと解してよい。

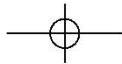
これを踏まえてこの文章を読んでみたい。太刀を取るには、我身を主宰する神と柄を持つ掌握の神と、人を殺す剣の神の三つの神が合一することが望ましい。正義感から発する怒りの気持ちを敵に打ち入れるのは太刀である。従つて、太刀に自らの神が乗り入らなくては、剣が威光のないものになってしまいます。剣により敵を殺そうとする自らの胸中にある神から、柄を持つ掌に

次も『示現流聞書喫緊録』の記述である。



東郷重位の墓（鹿児島市）





刀剣の歴史と思想

示現流にみる心の利剣

神の力が入り、その神の力が太刀の打つところの神に入り、さらにそこから我が胸の神に通達するという。このように、神が循環して端がなく、太刀の神と柄を持つ神と我が神が一つの円のようになつていなければならぬ、といった内容である。

端的にいえば、神を循環させつつ、柄を持つ掌を媒介とした、我身と剣の一体化を述べている。

もしそうでなければ、「我神力徹する事薄くして剣先を失ふ也」（我が神の力が徹することなく剣先の働きを失う）とも述べている。

**神道－神助の思想
仏教－克己の思想**

想のように神^{カミ}の助けといった要素が全くないということである。あくまでも自らの心（神）の力で、剣と一体となつて敵を倒す。そのためには自らの心に煩惱がないことが前提であり、これについては心の利剣つまり剣のイメージで斬る。

そういういた思想である。
ここには、神助の思想から、自らの内面を自立的に正して問題を解決するという克^{ハラフ}己の思想への移行がみられる。

(2) 「しげかた」と読まれる場合もある。
(3) 柳生宗矩が寛永九年（一六三二）に著した。
(4) 心のあり様を、理想とする状態に高める工夫。その理論。

〔註〕
(1) 周知の通り、日本の信仰においては仏教伝来以後、神道と仏教が融合する、

(5) 中村元他編『仏教辞典』（第二版）岩波書店、参照。
(6) 本連載第14回目に紹介済み。

